

石牟礼道子論

—虚実世界と虚空世界が交感し行き来する思想—

立命館大学院応用人間科学研究科

対人援助学領域

人間形成・臨床教育クラスター

高橋 幸子

本論文は、作家石牟礼道子の思想を手がかりに、人間がこの世に生を受け、存在者となり、やがて死を迎えるという「生」の過程において、人間が生きることの根源について問うているものである。また、「障害」をもつことや生を受ける「境遇」が、当事者にとって、周囲の者にとってどのような意味をもたらすのかといった、「生」への問いについての応答を見出していく。

代表作「苦海浄土 わが水俣病」には、水俣病事件は、近代文明社会によってもたらされたものであり、原因である企業、それを許してきた国家、そして結局それらを創り出した根源である、自分を含めた人間存在、言うならば「大いなるもの」を告発するために、石牟礼が変貌をもって覚悟する姿が描かれている。水俣病は、チッソが流し続けた工場排水によって起きた公害病であることが明白であるために、患者の姿はチッソから受けた「犠牲」の表象にしかなり得ない。水俣病患者家族は、チッソという企業、国家、人間によって創られた近代文明の「犠牲者」という構図がある限り、「犠牲」の意識は重く長く留まらせ、その「生」を犠牲化させていくのである。石牟礼の描く水俣病患者家族は、己の「生」への意味を問い続け、問い続けながらも「犠牲」の姿としてでも「生」を選んでいく。しかしそこには「狂うこと」を含んでいる。第一章では、「苦海浄土」から、水俣病患者家族の魂をもった石牟礼の「生」への語りを、「狂うということ」、「うつくしいということ」という視点から読み解き、患者家族の受難受苦を浮き彫りにさせることで、「犠牲」の姿として「生」が在ることを考えていく。第二章では、「樺の海の記」から、石牟礼が生と共に受けた応答の宿命について読み解き、そしてそれが石牟礼の思想においてどのような影響を及ぼしたのかを論じていく。また、「おもかさま」と呼ばれる盲目の狂女である祖母と石牟礼の交感される世界観に、人が「狂うことで保たれている生」を考察し、石牟礼の思想を深めていく。そしてここでいう「変貌」とは、どういった告発を含んでいるのか、第一章では寄り添えなかった部分から掘り下げていく。第三章では、第一章で読み解いた、生殖という「性」の世界が、「生」の根源として存在しているという、石牟礼の「生」の本質を再考察し、更に深めていくことを試みる。人間の「生」の本質を「生」と「性」というあえて狭義の枠組みで構成し、そこに「苦海」、「浄土」という両義性をそれぞれに考察する。最後に、筆者が問うてきた「生」への応答は見出せたのか、その先には何が見えたのかを、自己対峙としてまとめている。「やさしさ」と「かなしみ」、「苦海」と「浄土」といった虚実世界から、ひとが生まれ死んでゆく、必ず還ることのできる場である虚空という、絶対的無の世界との交感を試み、それが人間の「生」において何を意味するのかを考察する。

Thoughts of Michiko Ishimure

-which allow us to sympathize and move between the virtual world of reality and the virtual world of emptiness.

Sachiko Takakashi
Ristumeikan University,
Graduate School of Science for Human Services

ABSTRACT: This paper explores the fundamentals of human life, referring to the thoughts of Michiko Ishimure, in the process of “the living” in which we human beings are given our lives in this world, become an existent, and face the death. In addition, the meaning of being “disabled” and certain life “circumstances” for both the person concerned and their families is also explored. In concrete, through interpreting the two major works of Ishimure, “Paradise in the sea of sorrow: our Minamata disease” and “Story of the sea of camellias,” I present her thoughts of “the living” at the fundamental of existence, “the Soul.” In the first chapter, based on the “Paradise in the sea of sorrow: our Minamata disease” I interpret narratives on “the living” by Ishimure who holds the soul of the families of Minamata disease, from the two viewpoints, “being insane” and “being beautiful.” In the second chapter, based on “Story of the sea of camellias,” I interpret Ishimure’s own destiny of responsiveness from the beginning of her life and how such her destiny influences her thoughts. In the third chapter, I focus on “the living” and “sexuality,” the two essences of “the living,” and contemplate on the ambiguity of “the sea of sorrow” and “the paradise.”

Key words : the thoughts of “the living”, Michiko Ishimure, Paradise in the sea of sorrow